

元旦礼拝

神われらとともに

詩篇 46 篇 1～7 節

マルチン・ルターには、フィリップ・メランヒトンという改革の協力者がいました。ルターは、ちよくちよく「フィリップ、詩篇 46 篇を歌おうじゃないか」と言って、この詩篇と一緒に歌ったと伝えられています。実際、ルターは、この詩篇から、先ほど歌いました「神はわが砦」（前の讃美歌では「神はわがやぐら」）という讃美を作っており、それは宗教改革を導く歌となりました。このように詩篇 46 篇は、いつの時代も愛され、特に、困難な時に、人々の慰め、励ましとなってきました。

1) 私たちを取り囲む苦しみ

詩篇 46 篇 2 節と 3 節に「たとえ地が変わり／山々が揺れ 海のただ中に移るとも。たとえその水が立ち騒ぎ 泡立っても／その水かさが増し 山々が揺れ動いても」とあるのは自然災害、とくに洪水や津波のことを言っているようです。東日本大震災のとき、津波が海岸沿いの町や村を破壊し、川を逆流し、山々に迫ってゆく様子はまさに海の中に陸地が飲み込まれてゆく光景でした。自然現象だけではありません。この 3 年間、世界中の人々が新型コロナ・ウィルスという目に見えないものの攻撃にさらされてきました。健康面だけでなく、政治や経済、社会や学校、教会や家庭も大きなダメージを受けました。まさに「地は変わり、山々が揺れる」ほどの混乱が世界に、また、私たち一人ひとりに起こりました。昨年は一旦戦争が起きれば美しい街が数時間もあればがれきの山と化しているのを私たちは映像によって知っています。心安らかにいられる場所はこの世の中にあるのだろうかという気さえしてきます。そのような大きな問題だけではなく個人においても健康上の問題、経済的な苦しみ、仕事のことや人間関係などでの悩みなど、私たちには様々なものが襲いかかりその中で翻弄されたことがあるかと思います。しかし詩篇の作者は「われらは恐れない」と言い切ります。「われらは恐れない」との確信は、私たちがそう思い込むことによって得られるものではありません。「恐れない」、「こわくない」、「大丈夫」と、呪文のように繰り返し、自分を納得させようとしても、本物の確信や平安はやってきません。一時的な気休めだけです。時間が経つと、心配や不安、恐れが戻ってきます。「われらは恐れない」との確信を得たいなら、自分が何事においても心配しやすく、すぐに不安になりやすい者であること、また、今、自分が直面している問題に対して恐れを抱いていることを素直に認めることから始めるとよいかと思われまます。つまり自分の無力を認めることが信仰の出発点となるのです。

2) 弱さと信仰

ただ信仰が深まれば、神の助けがいらなくなる、罪の赦しが必要でないほど聖くなる、神を必要としないほど完全になるのというわけではありません。むしろ、自分の弱さ、足らなさ、罪深さが分かって、より神に信頼するようになる、それが信仰の成長です。聖書の人物でも、歴史上の人物でも、信仰の模範とされてきた人たちは皆、自分の弱さを知り、罪深さを知る人たちでした。信仰の強い人というのは何者にも動じない人ではありません。思い煩いや不安、恐れを持っていました。だからこそ、自分に頼るのではなく、神に信頼し、神に助けを呼び求めたのです。ダビデは詩篇 56:3 で、「心に恐れを覚える日／私はあなたに信頼します」と言っています。

パウロも、こう言っています。「しかし主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである』と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。ですから私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜んでいきます。というのは、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」（コリント第二 12:9-

10)「私が弱いときにこそ、私は強い。」なぜでしょう。自分の弱さを知るからこそ、最も力あるお方に信頼するからです。これは、「キリストが私の力」という信仰の告白です。詩篇 46 篇 1 節で「神は われらの避け所 また力」と言っているのと同じことです。信仰者は自分の力で恐れを克服し、襲って来る苦しみ立ち向かい、内面の葛藤と戦うではありません。その力は神の力、神から与えられる力なのです。そして、詩篇 46 篇 1 節では、「苦しむとき そこにある強き助け」と言って、その神の力が、いつでも、すぐに見つかる場所に、手の届くところにあると言っています。「避け所」とは緊急時の「避難所」のことです。何かあったとき、この地域の人はここに避難するようと、学校や公民館など、身近な場所が避難所として指定されています。それは地図を調べてから行かなければならないようなどころではなく、誰もが知っている場所が選ばれています。避難所に入るのに予約や、身分証明書、お金は必要ありません。誰でも駆け込めば、保護してもらえます。神もまた、そのような避難所になってくださるのです。誰であっても、神のもとに駆け込む者を、神は決して退けず、受け入れ、守ってくださいます。神は、私たちの「避け所」、「苦しむとき そこにある強き助け」です。「今日はもう閉店です。明日、また来てください」といったことはないのです。神は 24 時間、週 7 日、いつでも、両手を広げて私たちを待っていてくださいます。苦しみが私たちを襲うとき、私たちの内側から問題が生じてくるとき、「神さま、まず自分の力でなんとかします。それでもだめだったら、あなたのところに行きます」などと言わないで、すぐに、神のもとに行きましょう。何よりも神に祈り、「神さま、私の力となってください」と願いましょう。それが、苦しみ、悩み、恐れから救われ、与えられた問題、課題を解決していくことになるのです。

3) 苦難の大水がいのちの水に

詩篇のほとんどは、大きな困難を乗り越えた後に、そこから救ってくださった神に感謝し、偉大なお力を持つ神を崇め、共にいてくださる神への信頼を言い表しています。それは、詩篇 46 篇でも同じです。4 節にも水が出てきますが 2 節、3 節の水は津波や洪水を連想させ、それは私たちに襲ってくるさまざまな困難や苦しみ、また、試練を意味しています。しかし 4 節では「川がある。その豊かな流れは、神の都を喜ばせる」とあって、もはや荒れ狂う水ではなく、静かにゆったりと流れる川に変わっています。ここで歌われている「川」は、まさに、神の都に住む者を生かし、豊かな作物を与える「いのちの水」として描かれています。苦難の大水がいのちの水になるのです。皆さんにも、困難や試練の津波や洪水から救われ、静かな水のほとりに導かれたという経験があると思います。この後、賛美します福音讃美歌 440 番に「主から受ける安らぎは河のように流れつつ日ごとにその豊かさを増し加えてかぎりない」嵐のような状況から救い出され、心に、神の平安が注ぎ込まれる。これは、試練の中でも神に信頼し続けた人にだけ与えられる体験です。人は、誰も、すぐに、簡単に、願うものを手に入れようとします。それで、少し困難があるとそれをあきらめてしまいます。神は、みこころにかなう願いをかなえてくださいますが、しばしば、困難の後にそれをお与えになります。それは、自分が手にしたものが、神からのものであり、それを自分一人の幸いのためにではなく、神のために、他の人のために使うことができるようになるためです。ですから、苦しみの時、困難にぶつかったとき、慌てたり、恐れったりしないで、神に信頼しましょう。神への信頼だけが、苦難の大水をいのちの水に変えることができるのです。ヘブル語のシャロームとはよくあいさつで言われますがもともとの意味は平和、平安という意味です。それは大変なことが起こらないようにということではなく、大変なことが起こっても神が共にいてくださることの力強さと満ち足りた心の豊かさということです。分かりやすく言うなら日本で一般に多くの人が求めているのは厄除けということです。災難に遭わないように、病や災いが自分にふりかからないように。しかしシャロ

ームは違います。試練や災難があろうとなかろうと神は共に居て下さってあなたを守ってくださるということです。

2024年今年はどんな試練、苦難が待ち受けているか分かりません。しかし神なる主イエスに信頼する私たちは恐れません。もし「恐れる」ことがあれば、私たちの避け所、砦である神のもとに逃れていくことができます。たとえ、私たちの周りが嵐のように荒れ狂っていても、主イエスはともにいて助け、守って下さいます。やがて私たちは、神のそば近くで、川のように流れる平安を味わうことができるのです。悲しみの涙を主イエスはぬぐい取ってくださり、苦難の日々を神と共に懐かしむかのようにして思い見ることが出来るのです。